

夜の戦士

池波正太郎



夜の戦

池波正太郎

東京文藝社



夜の戦士

一三〇〇円

昭和五十五年四月三十日発行

著者 池波正太郎
発行者 角谷奈良雄

発行所 株式会社東京文藝社

本社 東京都新宿区大久保二六二

出張所 東京都新宿区松方町一番地

振替・東京六二二七五七

電話・(三六〇)二五五〇

0093—803249—5170

無検印承認

夜の戦士

目次

信玄館	一五
甲賀忍法	二三
塚原卜伝	二五
秘帖	二七
戦鼓	二九
秋田	三〇
川中島	三二
決戦	三三
家郷	三五
駿府の城	三六
忍びの風	三八
乱雲	四〇
清洲の雨	四二
謀略	四四

二〇〇
二二〇
二二一
二五〇
二五九
二七五
二八八
二九九
三三五
三三五
三三三
三六二
三七八
三八六
四一四

装
幀
村
上
豊

信玄館

一

久仁は、ふっと目ざめた。

寝ぐるしくて、むしあつかった。

うすもの一枚すらまどつてはいない久仁の裸身は、何枚も重ねた絹の夜具の上で汗ばんでいた。

それに、彼女が寄りそって寝ている御屋形さまの体温は、いろりの火よりもなまなましく熱い。

御屋形さまも眠るときは裸体であった。

山脈にかこまれた甲斐の国（山梨県）にもすでに春は来ていたし、この武田家の居館が構えられている甲府でも、桜はさかりをすぎようとしている。

御屋形さまは、厚くもり上った胸肉を夜着からのぞかせ、ふとい左腕で、久仁のまるい肩を抱き、正しい寝息をたてていた。その右腕は、もうひとりの侍女の裸身を抱えこんでいるのである。

御屋形さまの胸にも腕にも、こわい毛が密生していて、はじめのうちは久仁も、そのざらざらした感触に体がすくんだものだが、いまは、もうなれてしまっている。

御屋形さまは、毎夜、二人の若い裸身の侍女を寝所に

はべらせ、これを両腕に抱いて眠るのであった。そのうちの一人は、ときどきかわることもあるが、ここ一年ほど、久仁だけはかわることがない。

久仁は、よほど御屋形さまの気に入られているらしい。

血なまぐさい戦場から甲府の館へ帰って来ると、御屋形さまは武装もとかぬまま、すぐに久仁を呼び、「白湯をもて」と命じられる。

これがここ一年ほどの習わしのようなものになってしまった。この一年の間に、御屋形さまは何度も甲府から出陣された。それがひと月になることもありふた月になることもあり、早いときは、十日ほどで帰って来ることもある。先頃も信州へ出陣して行ったが、間もなく館へ戻った。それが十日前のことである。合戦は行なわれなかったようであった。

（今夜は、ほんにむしあついこと……）

燭台の蠟燭の灯が、かすかに寝所の一部を闇の底から浮き出させていた。

汗にしめった左の乳をおさえ久仁がそっと寝返ろうとしたとき、

「動くな」

眠っていたものとはかり思っていた御屋形さまが、いきなり久仁にささやいた。

おどろいて久仁は、御屋形さまへ視線を走らせた。

「……？」

御屋形さま——武田信玄（晴信）の、顎から鼻の下にかけて見事にたくわえられた濃いひげや、青々とそりあげた坊主頭は枕の上からびくりとも動かなかった。信玄の両眼はしずかに閉じられたままであった。

二

信玄の向う側の侍女は、まだ少女のおもかげが残っている顔を、信玄の腕の下あたりに押しつけ無邪気に眠りこんでいた。

深沈とした春の夜の闇の中に、信玄の寝息だけがただよっている。

「動くな。じっとしておれ」

眼をとじたまま、もう一度、信玄が久仁にささやいた。久仁は緊張に青ざめ、身を固くして信玄の腕の中で息をつめた。

武田家は、源義光が甲斐の国を朝廷からたまわり、その領主となつてから三百年もの間、この山国を守り治めてきた。

四代の信義のころ、甲府盆地に近い韮崎の近くの竹田に居城をうつし、その地名をとつて姓を武田とあらためた。それから十九代目の領主が武田晴信ということになる。

晴信が出家し、頭をまるめて『信玄』と号したのは、

永禄二年、三十九歳のときである。

それから二年たったのだから、いまの武田信玄は四十一歳の男ざかりであった。

僧籍にはいつたからといって、何も経をよんで後半生を送ろうというつもりではない。出家した信玄の心の底には、激烈な決意がひそんでいたのである。

酒にも女にも、あらゆる人生の愉楽に別れをつけ、今こそ全身の力をこめて事にあたろうという決意であつた。

日本の諸国にひしめき合う戦国大名を制し、天下の覇権をしっかりと自分の手につかみとうとうという決意である。

だから、全裸の侍女を抱いて眠っても、これを犯すこととはしない。

「昔の余を知るものは本気にすまいが、いまの余は、若い女の体と共に眠るだけのことじゃ。それだけでよい。それが、余の心身に若々しい力をあたえてくれる」

信玄は、氣に入りの軍師、山本勘介にこんなことをいつて笑つたことがある。

青年のころから、合戦にも政治にも拔群の力量をうたわれた信玄だが、女色の方もこれに劣らなかつた。これまでに六男五女をもうけているが、それは表向きのこと、子を生ませた女性も、正室の三条どのの以外に何人あるか、両手の指ではとうてい数えきれまい。

その夜が明け、まんじりともしなかった久仁が夜具の中からすべり出ようとしたとき、信玄が眼をひらいていた。

「昨夜の曲者め、今夜もまた、やって来よう」

三

「昨夜、そのようなものが……？」

久仁はすると、夜具の中からすべり出ると、やや狼狽しつつ衣服をまといながら、

「なれど、何の物音もきこえませなんだ」

「余が動くなど、二度ほどいうたな」

「はい」

「あのとき、曲者めは、この……」と信玄はあごで夜具の上をしめし、

「この床下で潜んでおったのじゃ」

「ま……おそろしい」

久仁は身をすくめた。

「ようも、この寝所の床下まで忍びこめたものだ。さぞ骨の折れたことであつたろう」

寝あぶらに光っているふとい鼻梁を、しきりに指で撫でつつ、信玄は苦笑をもらした。

信玄の右側に横たわっているもう一人の侍女は、まだ眠りからさめてはいないようであつた。

奥庭の樹木に鳴く鳥の声が、朝の光りと共に寝所へ流

れこんできていた。

この寝所は、畳数にして二十畳ほどの板張りになっており、その中央の一段高いところに畳を八枚しき、これを四枚の長屏風でかこんである。そこへ信玄の夜具がしかれるのであつた。

しかもその真上の天井と真下の床には、板の上にうすい鉄板がはりつけられ、刺客の襲撃をふせぐようになっている。

甲府盆地の北端の一角が、細く山ひだの中へ吸いこまれた躑躅ヶ崎の高地に構えてある武田信玄の居館は、南北百六間、東西百五十六間という宏大なものが、それにしても、その構造はあまりにも複雑であり、秘密の匂いにみちているようであつた。

だが、そのようなことに久仁は関心をもつていないし、もつべき理由もない。

それよりも、そそくさと帯をしめかけている久仁の体をじっと見つめている御屋形さまの眼の光りに、

(もしや……?)

衣服の下、自分の肉体の秘密をくまなく探りとられてしまっているようなおのきを今朝もおぼえた。

それは、十日ほど前に、信玄が信州から館へもどり、例のごとく久仁が白湯の碗をささげて御屋形さまの前へ出たときから気になっていたことなのである。

四

そのとき、久仁の手から白湯の碗をうけた信玄は、ふと、厚い唇へ碗をもつていった手をとめ、いぶかしげに、久仁の面を、そして上半身から下半身へかけて、ゆつくりと眺めまわしたのである。

奥庭に面した主殿の床几にかけた武田信玄は、兜だけはぬいでいたが、愛用の黒糸織しの鎧の上に紫の法衣をつけ、嚴のような威容にみちみちていたものだ。

その御屋形さまの凝視をうけただけで、久仁は早くも動揺してしまった。

逃げるように引き下がったが、久仁は全身に冷たい汗をかいた。

今年で十七歳になる久仁は、処女の感情を隠すすべはまだ知らない。

すでにそのときの久仁の体は、男を知ってしまっていたのだ。

「余がゆるすまでは、男とまじわってはならぬ」

寝所へはべる侍女の中で、久仁だけが信玄にこんなことをいわれていたし、久仁もまた、それをほこりに思っていたものである。

はじめは、いやらしく感じていたものだが、近頃の久仁は、処女の芳香がみなぎる裸身を、たくましい御屋形さまの腕にゆだねて眠ることが、むしろやすらかな思い

であった。

信玄のたくましい、鋼はねのような体に寄りそって眠るだけのことなのである。それ以外の何ごとも、信玄はしようとはしない。

「そちの体の匂いは、いかな名葉にもまさって、余に元気をあたえてくれる」

まじめくさった重々しい声で御屋形さまにそういわれると、久仁はうれしかった。信玄に抱かれて眠ることは、この館から四里ほど離れた花鳥の村にいる父親の胸に抱かれて眠った幼女のころを久仁に想い起させる。

土くさい父親と違って信玄の体臭は脂濃あぶらこいものであったが、毎夕入浴のときに、うすく全身の肌にぬりこめる香油の匂いがまじり合い、それが温い体温にとけると、何ともいえぬよい匂いがするのだ。久仁は、御屋形さまの匂いが好きになってきていた。

「余がゆるすまでは、他の男を知ってはならぬ」といわれたときも、

「はい!!」

ほこらしげに、久仁は誓ったものである。その誓いを、久仁は破ってしまった。しかも、御屋形さまが信州へ出陣した留守にである。

それでも、この十日の間、信玄はそのことについて一言もふれなかった。

ただ、いたずらっぽく、しかも意地悪げな微笑をふく

んだ視線が絶えず久仁に投げかけられた。

五

「御屋形さまは、きつと、わたくしたちのことを知っておいでになるに違いありません」

久仁は、男の胸に顔をうめ、声をふるわせた。

「おれも、とうてい上様の眼はくまらせぬものと思うていた」

男は、嘆息した。

といつても、困惑しきつてもらした嘆息ではないらしい。やれやれ、ついに見つかってしまったかという明るいあきらめがふくまれている『ためいき』なのである。

陽は高くのぼっていたが、居館西北の高地の一隅にあるこのあたりは、びつしりと竹林にかこまれていて、竹の葉の幕を通して流れこんで来る陽の光りが、久仁と男の顔を蒼くそめた。

ここは、信玄の長子、太郎義信が住む曲輪の一部で、竹林の道を少したどって行くと毘沙門堂がたてられてあり、そのすぐ下は、高さ一丈の土堤をめぐらした濠の水が深ぶかとたたえられている。

久仁が、男の愛撫をはじめてうけたのも、この竹林に連なる赤松林の中であつた。

男は、丸子笹之助といって、太郎義信の近習である。

笹之助は二十六歳だというが、二二三つは若く見える。

栗色の、なめした皮のような皮膚が顔にも体にも張りつめていたし、瞳は大きく、御屋形の信玄によく似たふとい鼻に愛嬌があつた。

「久仁どの、あまり気にかけぬことだな。おれもおぬしも、上様のおぼえがめでたいのだから、まさか罪をうけることもあるまい」

笹之助は、抱いた久仁の肩を軽くたたいてやり、むしろ屈託なげに、こんなことをいう。

「なれど、わたくしは御屋形さまから……」

「おぬるしあるまで、男とまじわるなとか……」

「はい」

「上様が、おぬしの肌を……つややかな、滑らかな、しかも乙女の生気にみちた肌の香をかいで、みずからの体に精気をたくわえようとなさるお心が、おれにもようわかつてきた。おぬしとこうなつてみてから、はじめて……」

「また、そのような……」

「しかし、おれは、もうおぬしを、上様の御寝所へはべらせるのがどうもたまらなくなつてきた」

「それは、わたくしだって……」

「この十日の間に、おれもおぬしも変つた」

「はい」

「変つた以上は、仕方がない」

「はい」

笹之助は、吐きすてるように、もう一度、

「仕方がなくなつたものは、仕方がない」

といった。そして笹之助は、狂わしげに久仁の唇を吸った。吸いつづけた。

しばらくして、久仁が思い出したように、

「あ……昨夜、御寝所の床下に曲者が忍びこんだのです」
「……」

このとき、一瞬のことであつたが、丸子笹之助の双眸に異様な光りが走つた。

六

「その曲者に、おぬしは気がついたのか？」

「いいえ、わたくしは何も……御屋形さまが、そつとわたくしだけに……でも、このことは笹之助さまだけにお話するのです。御屋形さまも他言は無用と、おおせになりましたもの」

「そうか……上様が気づかれたのか……」

放心の声であつた。

久仁は眉をしかめた。急に、昨夜の恐怖がよみがえつたようである。

馬のいななきが何処かできこえた。

そして、居館をおおっている鬱蒼たる樹木の彼方から、何騎もの馬蹄の音が次々に近より、居館の中へはいつて来る様子であつた。

今日もまた軍議がひらかれるのであろう。

永祿四年の今年にはいつてから武田信玄は、領国の磐の守護を強化すると共に、信州の松井の郷へきずいた海津城を守る麾下の部将・高坂昌信のもとへかなりの部隊を派遣し、兵力を増強させた。

「いよいよ、今年こそ、上様は上杉輝虎との決戦を行ない、最後のとどめをなさるおつもりなのであろう」

武田の部将たちも、早くからその覚悟をきめているようである。

越後を支配する上杉輝虎は、信玄と同じ仏門に帰依していて、号を『謙信』という。

甲斐と越後の間にある信州を制覇するべく、武田と上杉の軍団はほとんど毎年のように信州へ押し出して戦鬪をくりひろげていた。

「今日もまた戦さ評定のようですね」

久仁は、木の間に主殿の屋根がわずかに見えている中、曲輪のあたりを見返つて、

「ほんに、戦さの絶えたこともない……」と、つぶやいた。

丸子笹之助が、つづいて何かいいかけた久仁の口を押えたのはこのときである。

「な、何を……」

「人が来る」

耳をすましてみたが、あたりはしんかんと静まり返っている。

それぞれ、城下の屋敷から参集する部将たちの馬蹄の音も、すでに絶えていた。

「来い!!」

低く叫び、笹之助は久仁の手をとって、竹林の道を駆けのぼった。

ものをいうひまもなかった。久仁は、石垣の突端にたてられた毘沙門堂の中へ笹之助によって押し込まれた。「出るな!!」するどい笹之助の声が、堂の扉の向うから飛びこんできた。

七

丸子笹之助は、久仁を堂の中へ押し入れると同時に、身をひるがえし、風のように走った。

赤松の林が、笹之助の体を呑んだ。

赤松の林と竹林をへだてている小さな草原に、毘沙門堂が春の陽をあびている。

竹林から影のように草原へすべり出て来たのは、北曲輪の番所を守る足輕のひとりであった。

孫兵衛とよばれるこの足輕は、もう四年も武田家につかえていた。

笹之助と孫兵衛は、草原をへだてて睨み合った。

「笹よ。おぬしは、またもしくじったな」

孫兵衛が、十間ほど向うの赤松のかげに半身を見せている笹之助へ声をかけた。

「声」といっても、それは音にならぬものであった。

孫兵衛の唇だけがうごいている。そのうごきだけを見て、笹之助もいい返した。これも音にはならない。

「死ねというのか」

孫兵衛の禿頭ハゲが、こつくりとうなずいた。

禿といつても、これほど見事に禿げあがっている頭もあるまい。一点の毛根すらとどめてはいないのみか、頭だけではなく、ひげも眉毛もないつるつるの顔貌は鉛色の不気味な光りを沈ませ、両眼は針のように細かった。

若くない年齢には違いないし、五十にも見え、四十にも見えるのだが、体つきは少年のしなやかさをそなえていた。

「笹よ」と、孫兵衛がいった。

「おぬしが、女の匂いにくつつをぬかし、事をあやまつたのは、これで三度目になる」

「忍者だとして、女を絶てという掟はないぞ」

「あの女は、信玄公が珍重してやまぬ回春の精じゃぞ。」

あの女とのあやまちを、信玄がゆるしておくとも思っておるか。おぬしにも、それはわかつておる筈じゃ……となれば……笹よ。おぬし、あの女を連れ、この館を逃げるつもりであろうが」

「仕方がない」

「仕方がない、仕方がない——いつも、おぬしはそれじやものな。だが、しくじりも三度重なったときには、死

ねと頭領さまも申された。おぼえておろう」

「おれは死なぬ」

「わしが殺す」

すべては、読唇の術による対話であった。

堂の中に息をころしている久仁にも聞えず、ほど近い北の曲輪の番所につめてゐる士卒の耳へも、むろんとどく筈はない。

次第に殺気をおびてきた二人の応酬が、微風よりもかそけく行なわれてゐるのは、武田家の、どんな者にも聞かれてはならないからである。

八

「裏切者の笹よ」

孫兵衛は、一步二歩と草をふんで近づき、

「おぬしはあの女に、体のみか、忍者の心までも吸いとられてしまうたな」

「仕方がない」

「ふふん。またか」

「孫どのに手向うぞ」

「わしに勝てると思うておるのか鼻たれめ」

「以前の笹之助とは違うぞ」

「では、笹よ。みなし児の笹よ。ふびんじゃが、命はもらった」

孫兵衛は、むささびのように草原を跳躍して毘沙門堂

の背後へ身をかくしつつ、左右の手をひらき笹之助へ向けて交互に激しく突き出した。

孫兵衛の両手から、大氣を引き裂いて笹之助の面上へ飛んだものがある。

『飛苦無』とよばれる甲賀忍者独自の武器が、それであった。

別に『苦無』という道具もある。これは一尺二寸ほどの一種の長釘で、これを石垣や岩山、または木の幹などへうちつけ高所の昇降にもちいるものだが『飛苦無』は形状が似ていても使用目的はまったく違う。

『飛苦無』は長さ二寸前後。手の親指よりややふとめの鉄製であつて、まず手裏剣と同じような役目をする武器だといつてよい。

この武器のあつかいに熟練した甲賀忍者は、それぞれに工夫をこらし、おのれの使いやすいものをみずから製作する。

孫兵衛が投げつけた『飛苦無』は、やや円錐形のものだが、その尖端と根もとに微妙な細工がほどこしてある。

思いのままに敵を撃ち、より強く敵の肉に食いこむための工夫であつた。

筒袖に短い袴を身につけただけの何処に隠しもつていたのか——毘沙門堂の背後から、赤松の林に向つて飛ぶ『飛苦無』は、びゅっびゅっと、するどい叫びをあげ、数挺の鉄砲から撃ち出される弾丸のように、何条もの鉄

線となつて笹之助に襲いかかった。

笹之助の両手からも『飛苦無』が孫兵衛に飛んだ。

だが、機先は孫兵衛が制していた。

攻撃は孫兵衛の方が一步も二歩も先にしかけていたのである。

孫兵衛の『飛苦無』をかわしながら投げる笹之助の反撃は、無効に近かった。

一本の赤松の幹だけを『たて』にとつてはいるが、その位置から背後にひろがる松林へ逃げこむことは、もつとも危険であつた。

孫兵衛は、堂のかけから眼と手だけを一瞬のぞかせて投げつけてくる。

そこをねらつて投げ返す笹之助の『飛苦無』は、いたずらに空を切るばかりであつた。

九

笹之助が、いまし松林の中へ身を運んでおいたなら、状況は、いくらか違つてきていたかも知れない。

最後の『飛苦無』ひとつを左手から右手にうつし、笹之助は苦しまぎれに、右手に見える窪地へころげこんだ。

それと見て、孫兵衛は毘沙門堂のかけから飛び出し、草原をななめに走りぬけつつ『飛苦無』を投げうった。

それは、毛すじほどの差で、

「うッ……」

およそ二間の距離を窪地へころげこんだ笹之助の左腕にかみこんだのである。

もし、笹之助が、とっさに左腕をあげてふせがなければ、恐るべき鉄矢は彼の左眼をたたきつぶしていたらう。

いや、孫兵衛が次に投げうつ鉄矢を、まだ一個でも残していたなら、笹之助の運命も、ここに、その展開を終えていたかも知れない。

孫兵衛は舌をうち鳴らした。

そして間髪もいれずに脇差をぬき、はね起きかけた笹之助へ躍りかかろうとして、

(……?)

ぎよつとして後ろを振り向いた。

毘沙門堂の扉を突き開け、草原に駆け降りたのは、久仁であつた。

「くせもの!! くせものにござります!!」

久仁は、絶叫した。

いかに静かな決闘ではあつても堂扉のすきまから、久仁が見のがせるものではなかつた。

孫兵衛は久仁を、ぎらりと睨んだ。

久仁へ飛びかかれれば、左腕の負傷のみに危急をのがれた笹之助が背後から反撃して来ることは明白であつた。

孫兵衛は久仁をあきらめ、ふたたび笹之助へ殺到しかけた。

これが、笹之助が腕に鉄矢をうけてから、二秒ほどの

間であつた。

しかし、孫兵衛は遅かつた。

この二秒は二人の立場を逆転した。

窪地から松林の草むらに躍ね飛んだ笹之助は、最後の

「飛苦無」を、

「やッ!!」

今度は気合を発して、孫兵衛に打った。

孫兵衛の体が、窪地の淵で、ぐらりとゆれた。

孫兵衛が歯をかみならした。

孫兵衛の右眼から血がふき出した。

孫兵衛は左眼ひとつを笹之助へぎらりと向け、

「鼻たれめ!! ようもやった」

うめくようにいった。

「くせもの!! くせものにござります」

久仁の声が竹林を下って行くのが聞える。

笹之助は脇差をぬき放っていた。

孫兵衛は、右眼に喰い込んだ鉄尖をぬきとろうともせず、血のしたたるままに、笹之助を睨んでいた。

十

北曲輪の番所の太鼓が鳴りはじめたのは、このときである。

領国に城らしい城を構えず、戦争とは敵を迎えるものではなく、敵を撃ち進むものだというのが武田信玄独自

の兵法であつた。

それだけに、この甲府躑躅ヶ崎の居館は、無防備のように見えるても、外部からの侵入に対しては万全の用意が常にととのえられているといつてよい。

それは、孫兵衛自身が熟知している。

「笹よ。今日のことを忘るるな」

一声を投げつけ、孫兵衛はびたりと笹之助に右眼の視線を射つけたまま、後退して行つた。

後退といつても、それは瞬きをする間もない速さであつた。

孫兵衛の体は毘沙門堂の縁までさがると、その縁に左手をかけ、反動を利用してぐるりと宙に舞いあがつた。

これを追わんとして、笹之助はためらつた。

甲賀の地で、少年の笹之助に忍者としての鍛練をほどこしてくれたのは他ならぬ孫兵衛なのである。

(孫どのを逃がしては……)

これからの自分の身は、絶えず危険にさらされるとわかりきつていても、笹之助の足は、松林の草むらに沈んだままであつた。

孫兵衛は、毘沙門堂の屋根の上をまわりつつ、脇差を笹之助に投げうった。

笹之助は身をかわし、飛びぬけようとする脇差の柄をつかみとつた。

孫兵衛は舌打ちをもらし、屋根から身を躍らせた。